

善導教學に於ける安心の意義

安 廣 隆 成

淨土發生者の実践行儀として、その外的表現の形式の本源となれる内的根柢の如何なるものを究明することは、實に發生者の根本問題でなくてはならない。これ即ち善導大師が散在幾至誠心叙下に、「若作如此安心起行」(淨全ニ・五五・下)といひ、亦往生礼讚前序に、「若過安心云々」(淨全四・三五四・下)と述べて安心の語を出し、その下に觀經所説の三心を玄說せられ、もつて淨土發生者の安心と定められた所故であらう。

所謂安心なる語は善導以前既に使用されてあり、特に天台は盛んに安心の法を説き摩訶止觀第五に、「止巧安心者止以止觀安於法性也」(大正藏至四十六卷・諸家部三・五六頁中)と云い、且つ之れに教他と自行の二種あることを説き、又更に人の根性に信行法行の利鈍あつて、それらをして各安心せしむる方法に亦止及び觀の種々の別あるが故に自行、教他合して六十四安心等あり、(大正藏至四十六卷・諸家部三・五六—五八頁)と説いてゐる。是は恐らく蓮華の安心説の影響をうけたものと思われ。斯様に善導以前より使用せられ、主に心を安住せしむるといふ義に用いられた。かくて善導は淨土門にも亦安心の説があるとし前述した往

往生講儀前序に

問曰今欲勸人往生者未_レ知_レ善惡安心起行作業定得_レ往生彼國也。答曰必欲_レ生_レ彼國土善如_レ觀經說者具_レ三心心得_レ往生乃至_レ具_レ此_レ三心心得_レ生也善少一心即不得_レ生。(淨金四・三五四下)

といひ又觀經散記に具に三心を釈し、その終りに

三心具_レ無_レ行不成_レ續行既成若不_レ生者無_レ有_レ是處也。(淨金二・六一・上)

といえり即ちその説である。是れは觀經所説の至誠心、深心、廻向發願心の三心をもつて往生の正因とし、之れを具して必得_レ往生の安心を確立すべきことを説いたものである。

又曇鸞では名号の謂れを附けて、仏助け給へと信づる一念を往生の正因とし、此の信に由つて我身の往生一定と心得するを安心決定とするのである。とにかく安心ということは心を安定すると言ふ意味であり、即ち體驗又は領解等に依つて心の安定不動を得に境地を云うのである。この様に安心なる語は經論釈の処々に使用せられ所であつて、その所頭の意義は以上述べた様に極めて多様である。

然しながら今こゝに云う所の安心の意味は、淨土行者としての宗教信仰確立して、殊勝の願力に安立する心の状態に名づけられたもので、法然上人が淨土宗階抄(和語燈錄卷二)に

淨土門にいらてきこのうへへ行につきて申さば心と行と相応すへき也。すなはち安心起行となづく。その安心とは、心つかひのありとまなり。(淨金九・五一九・下)

と述べ、又圓師は法華記釋卷四に

又安心者有人云安心謂_レ流轉凡心安住三心生淨土故云安心、又流轉凡心安住菩提心成_レ仏果故云安心也云々、今云安心者安置也心者心念也謂_レ置念於所求所歸去行三云安心

也云々 (淨全二・一一・上)

と云ひ三種に分別して解説し、最後の一款をとつて正義とせられたのである。

淨土往生の正因たる三心の必要なることは今更云うまでもないが、その一心をも缺いては往生は不可能である。これは經文に「具三心者必生彼國」と説示されてあり、台論も礼讃に、

具此三心、必得生也。若少一心、即不得生。 (淨全四・三五・下)

と述べているのを見ては明らかである。又散論義において廻向発願心を釈し終りてその次に

三心既具、無行不成。願行既成、若不生者、無有是處也。 (淨全二・六一・上)

と述べている。以上の様に淨土願生者は必つ三心を具足せねばならないのである。又家相は選振衆の八章段に「念仏行者必可具足三心之文」という題を置き、疏經散論義、往生礼讃の文を引き私釈している。即ち、

私云所引三心者、是行者至要。所故者何。經則云、具三心者、必生彼國。明知具三心、必得生。起則云、若少一心、即不得生。明知一少是更不可。因茲欲生極樂之人、可全具足三心也。

(淨全七・四五頁)

と述べている。亦三祖も淨土家行者用意問答に「念仏三心之事」という題を置き、その中に三心具足を強調している。即ち、

ゴノ三心ヲ具シテ念仏セン者ハ弥陀ノ本願ニ相應シテ必定シテ往生スベシ若シ一心モ少ナハ生ル、コトヲ得ベカラズ能我衆心ヲ願ミテ三心ノ具ト不具トヲ知ルベキナリ。

(淨全十・七〇・四・上)

といつてゐる。

要するに浄土往生の正因たる三心を必ず具足せねばならぬことは、浄土願生者として最も
所要であることである。

以上

第五節 隨の出生本意の故